

# 大東文化歴史資料館だより

第28号 2020.9.30

## 館長就任のご挨拶

大東文化歴史資料館館長  
経営学部経営学科教授

小松 義明



2020（令和2）年4月より、大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）館長を拝命いたしました。よろしく申し上げます。

大東文化大学は、1923（大正12）年、当時の国会にあたる帝国議会の決議によって創設された大東文化協会が設置する大東文化学院を前身とし、中国学、日本文学、書道などの分野で比類ない伝統と歴史を誇ってきました。靖国神社のある九段下駅すぐそばに開校した当初は1学年50名ほどの小さな学校でしたが、漢学を志す青年たちにとっては、その分野で功績を持つ極めて著名な教授陣から直接指導を受けることができる、憧れの学校でもありました。その後は社会の発展と変化にともなって学部学科の開設を行い、今日では人文・社会科学領域だけでなく体育・保健衛生系の領域までもカバーする、8学部20学科を擁する総合大学へと発展し、全世界に国際交流の輪を広げています。創設の理念である「東西文化の融合」は脈々と受け継がれています。

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）は、大東文化のこれまでの歩みを皆様にご覧いただくため、2006（平成18）年4月に正式に発足し、校史に関する調査・研究並びに資料の収集、整理、保存および公開を行っています。その一環として、本資料館では半期ごとにさまざまなテーマでの企画展を開催しています。これまで26回の企画展を実施しておりますが、2019（令和元）年には「写真に見る大東生—沿革史の中に描かれた学生像—」、「平沼騏一郎と土屋久泰—大東文化を創った二人のリーダー—」を開催しました。リサーチのために訪れる研究者もあり、教育・研究面での国際交流の場にもなっています。

2023（令和5）年にはいよいよ創立百周年を迎えます。本資料館では2009（平成21）年より、

大学の個性の確認、情報公開への対応、自校史教育への活用等から百年史編纂の準備を始め、2010（平成22）年7月には、「百年史編纂委員会」を設置しました。2017（平成29）年には『大東文化大学史研究紀要』を創刊し、大学史研究をより一層進めるとともに、大学ウェブサイト上に百年史の特設ページを設けました。同時に、「大東文化大学史研究会」の定期的な開催も行なっており、最前線の研究成果を報告する場を設けました。これまでの研究会には教職員のほか同窓生を含む関係者が多数参加してくださり、毎回盛況となっています。また、同窓生へのインタビュー調査も引き続き行なっていく予定です。これらの試みは、多くの方々に研究成果を知っていただくだけでなく、大東文化が日本近現代史の中で果たした役割を解明し、同時に百周年以降に向けた新たな創造的活動の可能性を探ることを目的にしています。

なお、本年より百周年記念推進事業は、全学規模に拡大して進められることとなりました。同委員長には中村宗悦副学長（前大東文化歴史資料館館長）が就任いたしました。アーカイブスとしては、中村委員長の下に置かれた百年史編纂プロジェクトを全面的にバックアップし、現在までの所蔵資料の活用はもちろんのこと、学内外の資料を改めて悉皆的に調査・確認・収集しつつ、編纂事業を進めていく所存です。

これらの取り組みを通じて、当資料館はこれからも国内外に「東西文化の融合」を発信する拠点として発展していきたいと考えております。皆様におかれましては、ご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

2020（令和2）年4月1日

## 『大東文化大学史研究紀要』第5号 原稿募集

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、下記の規定に沿って原稿を募集いたします。今年度の投稿締切りは12月中旬を予定しております。投稿を希望される方は、氏名・ご所属のほか、原稿（論文その他）種別、予定されるタイトル及び文字数を10月末日までに下記のメールアドレスへお知らせください。積極的な投稿をお待ちしております。

## 【投稿規程】

1. 大東文化大学史研究に資する研究成果を広く公募する。論文、研究ノート・資料紹介、エッセイは未刊行のものに限る。
2. 投稿資格は問わない。審査料・掲載料については、投稿種別を問わず無料とする。
3. 『大東文化大学史研究紀要』の編集は、百年史編纂委員会委員によって構成される『大東文化大学史研究紀要』編集委員会（以下、編集委員会）がおこなうものとし、編集委員会は各投稿論文等の審査（外部審査委員に審査を依頼する場合もある）をおこなう。編集委員会は審査の結果を受けて投稿の採否を決定する。なお、掲載に至る過程において執筆者に加筆修正を求める場合がある。
4. 『大東文化大学史研究紀要』に掲載される文章すべての著作権は、大東文化学園が保有する。
5. 論文等の形態について、次のような指針を定める。
  - (ア) 本文の使用言語は、原則として日本語および英語とする（原典部分はこの限りではない）。
  - (イ) 論文の長さは原則として、タイトル、末尾注、図表、数式および参考文献を含め、日本語の場合で32,000字以内。英語の場合で8,000 words 以内とする。
  - (ウ) 日本語・英語いずれの場合も、約250 words の英語要旨を付けること。
  - (エ) その他、執筆要項については百年史編纂サイトを参照のこと。
6. 投稿は随時受け付けるが、当該年度発刊号のメ切はその都度告知する。
7. 原稿はWord等で作成すること。論文原稿には、投稿者の氏名、論文タイトル、総字数、住所、電話番号、E-mailアドレスを記載した表紙を付し、下記のアドレス宛に送付すること。なお、手書き原稿投稿を希望する場合には事前相談に応じる。
8. 研究ノート・資料紹介については論文に準ずるものとする。字数は日本語で20,000字以内、英語で6,000 words 以内とする。
9. エッセイについては、日本語で10,000字以内とする。  
※他の規定については論文の規定に準ずるが、百年史編纂委員会の判断で手続きを簡略化できるものとする。
10. 紀要に掲載された論文等は、大東文化大学機関リポジトリにおける公開を行うものとする。（併せて大学ホームページ上において目次情報の公開を行う）。掲載された原稿は、執筆者からの申し出がないかぎり、ウェブサイト上で公開されることを了承されたものとして扱う。

以上

エントリー（投稿）・そのほかに関する問い合わせ先：archives@ic.daito.ac.jp

## \* 大東アーカイブスの動き \*



2019年11月、新潟県村上市在住の同窓生・伊東和信氏（大東文化学院本科15期生）へのインタビューを行いました。朝日新聞出版アエラムック『大東文化大学 by AERA』制作取材に同行したもので、大修館書店『大漢和辞典』（通称「諸橋大漢和」）の貴重な編纂秘話を伺うことができました。百歳（取材当時）となられる伊東さんは、お元気な様子で当時の多くの逸話をお話くださいました。

1941（昭和16）年3月に大東文化学院本科第二部（国語漢文科）を卒業した伊東さんは、在学中から辞典編纂室のアルバイトをしていたことを縁に大修館書店に就職、大漢和辞典のゲラ刷りの確認作業に従事しました。残念ながらわずか1年後の1942（昭和17）年4月には陸軍に招集されてしまったため、編纂風景を見ていたのは1年余りと短いものではありましたが、1943（昭和18）年9月に刊行された「幻の第一巻」の最後の仕上げの状況を垣間見られていました。『大漢和辞典』編纂は、1927（昭和2）年から約30年にわたって続けられた大事業でした。敗戦後の混乱を経て1955（昭和30）年に改めて第一巻が刊

## \* 資料紹介 \*

## 『進学指導』（昭和17年12月号、第七卷第十二号、英通社）

今回紹介する所蔵資料は、英通社（英語通信社）から1942（昭和17）年12月1日に発行された、『進学指導』12月号（第七卷第十二号）という受験・進学雑誌である。同誌には、現役在校生が自校を紹介する「我等が学園を語る（時局下の我学園を語る）」と題する名物企画があり、同号には「大東文化学院」が掲載されている。

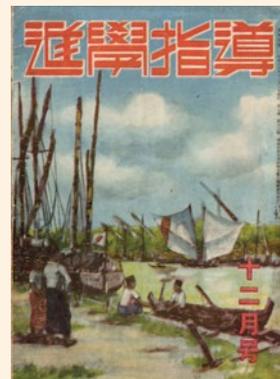
『進学指導』は、1935（昭和10）年6月に創刊した受験・進学雑誌で、当時発行されていた受験関連雑誌群のなかでも相当の発行部数を誇って（旧制の）中学生に愛読された。当時の受験雑誌といえば、1941（昭和16）年に『受験旬報』をリニューアルして創刊した『蛭雪時代』（旺文社）や『受験と学生』（研究社）などが著名であるが、『進学指導』はそれらと並ぶ人気雑誌だった。ただし、旺文社社長の赤尾好夫による『受験英語単語の総合的研究』（1934年）が、いわゆる「赤尾の英単」と呼ばれて人気を博したことをきっかけに、旺文社は突出して他の追随を許さない急成長を遂げた。『蛭雪時代』の発行部数は、戦時体制下となった1942（昭和17）年時点でも9万部の発行部数となり、同時期の『受験と学生』および『進学指導』の発行数約3万部を大きく引き離すこととなった。とはいえ、英語通信社による『進学指導』は当時の三大受験雑誌の一つであった。

さて、「我等が学園を語る（時局下の我学園を語る）」中で紹介された「大東文化学院」は、東亜政経科に在籍していた現役学生、橋本元彦氏による執筆である。同号に同時掲載されたのは、大東文化学院のほかに、北京興亜学院、多賀高等工業学校、山口高等商業学校の4校であった。大東文化学院は「大東亜の建設者を生む 大東文化学院」と題し、99ページの終わりから101ページまでの、2ページ余を割いて掲載された。

その内容は、「はしがき」「政経科設置の由来」「報国団の活動」「出題傾向とその対策」から構成されている。「はしがき」には、大東文化学院はそもそも二松学舎と並ぶ漢学儒教教育の学校であるといったことが紹介され、それゆえに近年新たに設けられた東亜政経科がまだ世間に浸透しておらず、「知っている人が少ないのを残念」に思ったため紹介することとした、と記されている。そのため、本文では東亜政経科のみを紹介し、当時の三部制のうちの修身漢文科と国語漢文科についてはほとんど触れていない。

「政経科設置の由来」では、時局を反映して大陸で活躍できる人材育成を目的としていること、なかでも「支那語」の中学校教員の無試験検定に合格した国内でも有数の学校のうちの一つであると自負する。「報国団の活動」では各班の紹介を行い、最後に「出題傾向とその対策」として入試情報について触れている。試験は、国語、漢文、国史、作文、口頭試問、身体検査からなり、通常六割程度できれば合格すると言う。最後に、合格後の宿舎について、学校寮完備ではないが、大東生が自治的に運営する「望雲書院」というものがあり、当番制の自炊を行って「愉快的な宿舎」で3年間を過ごせることを紹介している。

（大東文化歴史資料館運営委員 浅沼薫奈）



行されましたが、戦前期に出された第一巻こそが大東生たちの学識と努力によって作り上げられた渾身の一冊でした。

伊東さんが携わった頃の1942（昭和17）年当時の校正ゲラが、偶然にも大修館書店内に残されていました。敗戦間近に戦時下の空襲によって組版を含むほとんどの関係資料が焼失してしまいましたが、この時のゲラだけが地方へ「疎開」していたため奇跡的に現存していたのです。この残されたゲラ等を元に、戦後の大漢和の編纂が続行されました。AERAによる制作取材に同行し、大修館書店本社内にあった当時のゲラの現物も見せていただく機会を得ました。そこには、戦前期の編纂の中枢にいた川又武先生等の直筆の赤字が一面に入れられた貴重な4校ゲラがありました。

さて、伊東さんはロシアの地で敗戦を迎えた後、故郷の新潟県へ戻り県立村上女子高等学校等の教壇に立ち国語教師を長く勤められました。しかし、あの時にもしも故郷へ戻らずに大修館書店へ復職していたら、それはどんな人生だっただろうかと当時を懐かしむように語られたのが印象的でした。

大東アーカイブスでは、引き続き同窓生のインタビューを行いつつ本学百年の歩みを辿っていく予定です。

（大東文化歴史資料館運営委員 浅沼薫奈）

## 百年史編纂事業の進捗状況について

百年史編纂委員会委員長  
経済学部現代経済学科教授 中村宗悦

2020（令和2）年に入って、世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大という状況に陥ったまま、いまだに収束が見通せず、大学はもちろん世の中全体の諸活動に多くの制限がかかっている状況です。2023（令和5）年に創立百周年を迎える本学の記念事業の一環として位置付けられている百年史編纂事業もまた、停滞を余儀なくされています。とくにこの2020年度前期は入構制限が取られ、対面でのミーティングも思うようにならない状況でしたので、ワーキング・グループでのミーティングも1回しか開くことができませんでした。しかし、『百年史資料編』（仮）の構成の大枠は何とか決まりましたので、現在のところ掲載資料の選定を粛々とおこなっていると。ただし、戦中期の資料収集はあまり進んでおりません。前号でもお願いしましたが、引き続き資料提供にご協力をお願いいたたく存じます（資料提供などにつきましては文末をご覧ください）。

本学ブランディング事業の自校史アーカイブスプロジェクトは、幸いにも昨年度末に集中して本資料館所蔵の貴重資料の写真撮影、デジタル化を進めることができました。デジタル・アーカイブスの構築をおこなう業者選定も無事に終了し、比較的順調に進んでいます。

また本年度4月から内藤二郎新学長のもとで、百周年事業の実施体制も一部見直しがおこなわれ、「創立百周年記念事業推進委員会」が立ち上がりました。

資料館が中心となっておこなっている百年史編纂事業もその下部組織として位置付けられ、学園全体の百周年記念事業全体との連携を、より深めていく体制が整ってきました。九十七周年を迎えることとなる2020年9月20日には、百周年特設サイトも公開する予定となっています（ただし、コロナ禍の影響で予定変更もあり得ます）。

もちろん、百年史特設サイト（「継往開来」<http://www.daito.ac.jp/100th/>）も引き続き、その内容充実をはかり、情報の発信を進めて参ります。とくに昨年度末には、英語ページ、中国語ページを作成し、公開いたしました。上記のトップからLanguageを選択していただきますと、英文・中文のページへリンクするようになっていきますので、是非、ご覧ください。

最後に、2019年度末に無事、『大東文化大学史研究紀要』第4号を発行できましたことをご報告申し上げます。引き続き、第5号発行に向けて準備をおこなってまいります。研究会の方は、次回いつどのような形でおこなうか、目途が立っていない状況です。研究会の開催が、いつどのような形になるのであれば、『紀要』は、年1回の発行を予定しておりますので、大学史に関するご研究の発表などございましたら是非奮ってご投稿をいただきますよう、お願い申し上げます。詳細につきましては、引き続き大東文化大学総務課（大東文化歴史資料館 担当）までお知らせくだされば幸いです。

## &lt;資料寄贈ご協力のおお願い&gt;

大東アーカイブスでは、引き続き本学関係資料のご寄贈をお願いしております。学園沿革史に関わる資料がございましたら大東文化大学総務課（大東文化歴史資料館担当）までご連絡いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 【大東アーカイブス活動記録】（2019年10月～2020年3月）

10.5	徳丸研究棟（歴史資料館事務室・研究室）修繕工事開始	1.23	ブランディング撮影説明会
10.16	全国大学史資料協議会全国大会参加（於：立教大学、～18日）		「100+10」聞き取り対応
10.19	木下成太郎関係資料受贈		AERA聞き取り対応
10.31	企画展入れ替え作業	1.29	ブランディング撮影開始 関係資料搬入作業①
	第26回企画展「大東スポーツの時代『若い力』と『挑戦』」公開	2.3	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加（於：千葉経済大学）
11.2	学園祭ギャラリートーク	2.10	板橋図書館貴重書庫内資料移管打ち合わせ
11.11	同窓生・伊東和信氏聞き取り調査・AERA取材に同行（於：新潟県村上市）	2.12	資料閲覧対応
11.13	武蔵野音楽大学、展示室見学のため来館対応	2.14	早稲田大学史資料センター、調査のため来館対応
11.15	大修館書本社辞書部へAERA取材に同行		同窓生より資料受贈
11.29	WG会議	2.17	学生支援課より学生生活動関係資料移管
12.17	紀要編集委員会会議	3.2	佐藤美和子氏（同窓生）より資料受贈
12.19	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加（於：UEC東京電機大学）	3.3	学生生活動関係資料、選別移管
1.17	亜細亜大学、展示室見学のため来館対応	3.23	学生生活動関係資料、選別移管 ブランディング撮影関係資料搬入作業②

大東文化歴史資料館だより

第28号

DAITO ARCHIVES NEWSLETTER Vol.28

発行：2020年9月30日

編集発行：大東文化歴史資料館

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

大東文化大学徳丸研究棟

TEL 03 (5399) 7646 / FAX 03 (5399) 7647

URL : <http://www.daito.ac.jp/information/about/archives/index.html>